

令和元年5月23日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02030

研究課題名（和文）『漢書』芸文志の動態的研究

研究課題名（英文）A Study on the Dynamic Aspect of Hanshu Yiwenzhi

研究代表者

内山 直樹（Uchiyama, Naoki）

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：20449284

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中国における現存最古の図書目録として知られる『漢書』芸文志について、とりわけ体例上特異な諸点に目を向け、それを前漢末期に生じた学術的諸課題への応答と捉えることで漢代学術史のなかに位置づけ、学術分類および個々の書物の帰類基準がいか形成されたかという問題についてその一端を解明した。具体的には春秋家の形成過程、詩賦略の位置づけ、劉氏父子の学術的背景といった事例について成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで主としてその体系性が注目されてきた『漢書』芸文志について、あえて体系性の綻びともいふべき点に目を向け、その分析を通して、学術分類および個々の書物の帰類基準の動的な形成過程を明らかにしたものであり、中国の伝統学術の基礎にして今に至る漢籍文化の起源でもある『漢書』芸文志に対し新たな見方を提供した点において学術的意義のあるものである。

研究成果の概要（英文）：Hanshu Yiwen-zhi is well known as Chinese oldest library catalogue in existence. It is highly rated for its systematisity in classification. This study instead focusses on some anomalies in it, treats them as responses to some academic problems in the last years of Early Han, and elucidates the process of forming the academic classification and the standard to categorize each book.

研究分野：中国哲学

キーワード：目録学 漢代 劉&#27462; 春秋学 辞賦 方技

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

『漢書』芸文志は、前漢末に劉歆(?-23)が編纂した宮中の蔵書目録『七略』をもとに、後漢の班固(32-92)が若干の手を加え、その著『漢書』に収録したものであり、唐末に『七略』が失われたため、今では現存最古の図書目録として絶大な価値を認められている。その意義は、個別の書物の真偽・成立年代・存佚の判定といった狭義の文献学的研究に資するにはとどまらない。6つの大項目、38の小項目からなる行き届いた分類体系を立てて書物を配列し、当時の学術の全体に渉る見取り図を一望のもとに示した点にこそ、その学術史研究にとってのこのうえない意義が存する。

ただし『漢書』芸文志には、それ特有の、扱いに慎重を要する点もまた存在する。以下に二点を挙げたい。

第一に、上述のように『漢書』芸文志の利点はその体系性・網羅性にあるが、それは裏を返せば、静態的な分析には向いていても、動態的・通時的な考察には馴染みにくいということでもある。そのため夙に清の章学誠(1738-1801)は、『漢書』芸文志中でも各分野の成り立ちを説明した総序や小序を重視し、「考鏡源流」(史的系統を明らかにすること)を主張した。しかしこの目的に到達するためには、ひとり総序・小序のみならず、劉歆の父であり前漢末の群書校定の責任者でもあった劉向(前79-前8)による校書記録『別録』(『七略別録』)の佚文をはじめ、漢代の諸資料との比較が欠かせない。『漢書』芸文志以後、西晋にはじまる四部分類へと至る流れについては、早くから目録学史上の重要案件とされ、近年に至るも研究が活発であるが、それに先立つ『漢書』芸文志自体の分類体系、およびその各部類への書物の帰属決定基準が、いかにして形成されたかという問題については、研究はまだ緒に就いたばかりといえる。

第二に、『漢書』芸文志の前身たる『七略』の編者、劉歆は、当時公許の学問であった経今文学に対抗し、宮中に蔵され陽の目を見なかった古文経伝に肩入れした人物として知られる。『漢書』芸文志六芸略各類において、博士に立てられていた今文経テキストを抑え、古文経が筆頭に掲げられていることからそれはわかる。つまり、『漢書』芸文志は必ずしも漢代学術の實際を公平中立に反映したものとは限らず、劉歆独自の主張を色濃く反映した部分も含まれており、両者を慎重に腑分けしなければ誤解を犯す恐れがある。そのため、劉歆の思想について並行して研究を進める必要がある。

代表者はすでに論文「『七略』の体系性をめぐる一考察」(『千葉大学人文研究』39、2010)等において、主に六芸略春秋家、詩賦略、兵書略を対象とした初歩的な考察を行ったが、問題は多岐に渉り、より多方面からの考察を必要とすると感じた。そこで今回、漢代の各領域を専門とする研究分担者と協力して『漢書』芸文志に対する多面的なアプローチを試みることにした。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では『漢書』芸文志を漢代学術史の流れのうちに位置づけるとともに、その分類体系や書物の帰属基準がどのような経緯で形成され、それが漢代学術史上のどのような動向を反映しているのかを、いくつかの顕著な事例に即して解明することを目的とした。

その際、『漢書』芸文志のうちでも体例上やや特異な点、いわばその体系性の綻びともいえるべき点にあえて着目し、それが前漢後期に固有の何らかの学術的課題に由来するのではないかという仮説を立て、それを検証することとした。それらの点は、『漢書』芸文志の体系志向が当時の現実的要請に直面するなかで頓挫を余儀なくされた痕跡と考えることもできるからである。

これに相当するものは『漢書』芸文志中に数多く指摘できるが、多岐に渉るため、本研究では項目を以下の諸点に絞って解明に取り組むこととした。

第一に春秋家の形成過程の解明である。『漢書』芸文志六芸略春秋家後半には『春秋』経伝の枠に収まらない11種の書物が著録されており、六芸略の体例から見て異例である。これら諸書については戸川芳郎・岩本憲司等の先行研究により、多く「義から事へ」という前漢後期における春秋学の変化を受け、左氏系の隊伍を補強すべく劉歆によって動員されたものであることが指摘されており、このことは漢代において春秋家の範囲が必ずしも固定したものではなく選択的に構成されていたことを示す。本研究ではこれを受け、前漢時代のより早い時期において春秋家の範囲がどのように設定されていたかを検討し、比較を行うとともに、その間の書物の出入りにつき、特に象徴的な意味を持つ事例を取り上げて集中的な考察を加え、前漢期を通じての春秋家の性格の変化を解明する。

第二に詩賦略の位置づけの解明である。詩賦略は他の五略に比べ、各類の小序を欠き、各類(とりわけ前三類)の分類基準がわかりにくいという特徴をもつ。この問題については従来ほとんど関心が払われていないが、『漢書』芸文志における詩賦略の位置づけの特殊さを反映するものと推測される。梁の阮孝緒「七録序」は詩賦略について、本来六芸略詩家に従属すべきものであって便宜的に分割されたにすぎないとしたが、もしそうであれば『漢書』芸文志の分類体系の成り立ちを解明する一つのヒントとなりうる。本研究ではこの古い仮説の妥当性を新たな視点から検討する。

第三に劉歆の思想の『漢書』芸文志に対する影響の解明である。すでに触れたように、『漢書』芸文志の前身たる『七略』の編者、劉歆は、経学上当時公許の学であった今文学とは立場を異にしており、そのことが『漢書』芸文志における群書の著録状況に陰影を落としている可能性

は強い。上に挙げた春秋家もその一例だが、このような痕跡をできる限り多く見つけ出すことは『漢書』芸文志の編纂思想を究明するうえで重要である。しかしその際、劉歆の思想を単純化して一面的に捉えたり、その『漢書』芸文志への影響の程度を過度に見積もったりしては、かえって真実から遠ざかることになるので、事は慎重に進めなければならない。そこで劉歆の思想を多面的に解き明かすことも本研究を目的を構成する一項目となる。

第四に『漢書』芸文志の諸問題をめぐる目録学史的評価の解明である。かつて章学誠は『漢書』芸文志に見られる重複著録や単篇別行といった特異例を意図的な措置として積極的に評価した。これに対し王重民は主として諸子略と兵書略の比較にもとづき、それらを群書整理の体制に由来する偶然の結果と断じた。このほか前漢時代に実在したことが明らかであるにもかかわらず『漢書』芸文志に著録されない書物の問題についても、従来の評価は分かれている。こうした評価を整理し検討することも『漢書』芸文志の体例を考えるうえで重要である。

最後に補足的な項目として、前三略（六芸・諸子・詩賦）と後三略（兵書・数術・方技）の関係の解明がある。成り立ちの異なるこれら二つ（あるいは後者を一つずつ数え上げれば四つ）の部分から構成されるという点こそは、『漢書』芸文志における最大の特異性といえるかもしれない。この項目については今回本格的に取り組む余裕はないが、予備的な調査に着手する。

3. 研究の方法

上記の研究の目的、特にその各項目は、多岐に渉るため個人で遂行するには限界がある。そこで本研究では漢代学術史を専門とする代表者の内山に加え、揚雄を中心とした漢代の辞賦研究を専門とする嘉瀬、漢唐古典学を専門とし目録学史に造詣の深い古勝、劉歆および両漢の際の思について多面的な研究を進める佐川を研究分担者とし、四名の共同研究により上記各項目の研究を効果的に遂行することとした。責任分担としては第一の項目を内山、第二を嘉瀬、第三を佐川、第四を古勝が主導し、全体を研究代表者の内山が統轄する。各項目それぞれについて見れば個人研究の色合いが強いが、相互の関連性を持たせるために適宜会合を開催し、知見の共有を図る。実際には地理的な障壁もあり全員が恒常的に顔を合わせることは困難だが、研究代表者を含めた二ないし三名による会合の機会を多く持つようにする。

また上記の研究の目的のうち最後の補足的な項目に関しては、研究状況を把握するために海外の専門家を招き講演会を開催する。さらに問題意識と研究成果を海外の研究者と共有しフィードバックを得るために、国際学会への参加と海外研究機関への訪問を積極的に行う。

4. 研究成果

まず、上記の研究の目的のうち第一項目の春秋家の形成過程については、最終年度に国際学会において発表を行い（中国語）その際の討論をもとに内容を補訂した論文が次年度刊行される予定である。そこで得られた知見は概ね以下のとおり。『漢書』芸文志六芸略の体例として、各家における「石渠閣議奏」の著録位置が経伝とそれ以外の書とを分かつ標識となっているらしく、そのような「石渠閣議奏」以下に著録される経伝以外の書の数、春秋家では11種と、書・礼・論語・孝經の諸家に比べ群を抜いて多い。かつそれら11種の書物はその性質上さらに「馮商統太史公」以前の8種と「太古以来紀年」以下の3種に二分できる。前者についてはすでに戸川・岩本両氏が指摘するとおり、劉向やとりわけ劉歆による『左伝』顕彰にともない、従来春秋学が追求の対象としていた「春秋の義」に対し、「事」という側面の価値が認識されてくるなかで、これらの書物に「事」を記したものの性格規定が施されたうえ、「春秋の事を継ぐ」という新たな春秋学の方向性に見合うものとして春秋家に附録されたという経緯が想定される。その際、問題となるのは、劉歆はともかくも、左氏派とはむしろ一定の距離を保ったと見られ劉向の位置づけであるが、これについて本研究では、同じく劉向の編纂になる『戦国策』『新序』『説苑』が『漢書』芸文志において六芸略春秋家と諸子略儒家とに分属する点に着目し、後二者が『虞氏春秋』『呂氏春秋』等、『史記』十二諸侯年表序においては『春秋』に関連づけられながら『漢書』芸文志では諸子略に著録される諸書と性質を同じくするものであることを論証し、劉向の過渡的位置を指摘した。さらに「太古以来紀年」以下の3種については、すべて佚書ではあるものの、そのうち一種である『漢著記』の『漢書』『後漢書』等における言及状況にもとづき、それがやはり劉向・劉歆父子の災異思想と根拠となった文献であり、漢代における『春秋』の対応物として扱われていたことを明らかにした。

次に第二項目の詩賦略の位置づけについては、研究分担者の嘉瀬が論文を発表し、詩賦略における諸書の著録形式を分類したうえで、それを実際の作品や史書における記述と照らし合わせることでその意味を解明した。さらに嘉瀬は揚雄賦および揚雄に関する研究を進め、数多くの国際学会において発表した（中国語）。

また第三項目の劉歆の思想については、研究分担者の佐川が劉歆の古史観・受命観について学会発表と論文を公にした。これは『七略』を直接扱ったものではないが、劉歆の春秋学に深く関わる研究であり、上記の『漢著記』に関する研究成果と連動するものである。

また第四項目の目録学史的評価については、研究分担者の古勝が目録学を主題とする二冊の著書を公刊し、劉向・劉歆の校書事業に関し包括的な説明を行うとともに、『漢書』芸文志の体例をめぐる歴代の批評を取り上げ検討した。

さらに補足的項目の兵書・数術・方技等三略の問題についても、中央研究院歴史語言研究所（台湾）より中国医学史を専門とする李建民氏をゲストスピーカーとして招聘し、千葉大学に

において研究集会「方法としての中国医学出土文物」を開催した。そこでは成都老官山漢墓等の最近年の出土文物を用いつつ、『漢書』芸文志方技略医經類の著録状況が示唆する漢代医学における黄帝・扁鵲・白氏という三学派へのアプローチの方法が議論された。本研究課題は主として六芸・諸子・詩賦の三略を対象とするものだが、この研究集会を通じて兵書・数術・方技の技術系三略の形成過程やその学術的背景に関する知見を得ることにより、総体としての『漢書』芸文志の動態的に対して重要な示唆が与えられた。なお、この研究集会には、国内外より医薬学の研究者を含む二十名強の参加者が出席し、学際的な観点から活発な議論が交わされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

古勝隆一・内山直樹・竹元規人、『文史通義』内篇二訳注(2)、東方学報京都、査読無、93、2019、pp.67-119

内山直樹、書評 程千帆・徐有富著、向嶋成美・大橋賢一・樋口泰裕・渡邊大訳 研文出版『中国古典学への招待 目録学入門』、中国研究月報、査読無、27-12、2018、pp.39-41

佐川繭子、劉歆「世経」の示す歴史認識について、國學院雑誌、査読無、117-11、2016、pp.40-56

嘉瀬達男、『漢書』芸文志・詩賦略と漢代の辞賦、日本中国学会報、査読有、67、2015、pp.48-60

〔学会発表〕(計9件)

嘉瀬達男、『法言』と典故、四川省揚雄研究会第二屆學術會議、2018年12月、西華大学(国際学会・招待講演)

内山直樹、漢代における春秋家の範疇について、阪神中哲談話会、2018年11月、やまと会議室

嘉瀬達男、楊雄『太玄』的写作目的、第十一屆漢代文学与思想國際學術研討会、2018年10月、国立政治大学(国際学会)

内山直樹、試探漢代春秋家概念之形成、第十一屆漢代文学与思想國際學術研討会、2018年10月、国立政治大学(国際学会)

嘉瀬達男、献賦与楊雄賦、第十三屆國際辞賦学學術研討会、2018年10月、湖南大学(国際学会)

内山直樹、『呂氏春秋』と生命哲学、東亜文人論壇 東方文明与生命哲学國際學術研討会、2018年8月、北京大学(国際学会)

内山直樹、伊藤東涯『古今学变』と儒教的“歴史性”、儒学的現代性与漢字文化圈的復興國際學術會議、2017年11月、魯東大学(国際学会・招待講演)

佐川繭子、『史記』における漢の受命について、日本中国学会大会、2016年10月、奈良女子大学

内山直樹、逐鹿と王命 前漢期王権論の展開、比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想、2016年9月、国際日本文化研究センター

〔図書〕(計5件)

古勝隆一、臨川書店、目録学の誕生 劉向が生んだ書物文化、2019、252p

金勲主編、宗教文化出版社、東方文化与心靈健康、2018、338p、内山直樹、張湛的「養神」思想与『列子』中「心靈健康」問題、pp.206-222

中国文化事典編集委員会、丸善出版、中国文化事典、2017、808p、内山直樹、目録学、pp.202-203

古勝隆一・宇佐美文理・永田知之、研文出版、目録学に親しむ 漢籍を知る手引き、2017、132p

志野好伸・内山直樹・土屋昌明・廖肇亨、法政大学出版会、聖と狂 聖人・真人・狂者、2016、264p (pp.69-144)

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：佐川繭子
ローマ字氏名：SAGAWA Mayuko
所属研究機関名：國學院大學
部局名：教育開発推進機構
職名：准教授
研究者番号（8桁）：00445719

研究分担者氏名：古勝隆一
ローマ字氏名：KOGACHI Ryuichi
所属研究機関名：京都大学
部局名：人文科学研究所
職名：准教授
研究者番号（8桁）：40303903

研究分担者氏名：嘉瀬達男
ローマ字氏名：KASE Tatsuo
所属研究機関名：小樽商科大学
部局名：言語センター
職名：教授
研究者番号（8桁）：80449537

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。